
魔王狩り

界軌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王狩り

【Nコード】

N5951W

【作者名】

界軌

【あらすじ】

なんの前振りも無く勇者にされ、家の裏山に『魔王狩り』に出掛けた私が出会うのは、珍妙な魔王……たち？ ゆるめの話を書きたかっただけなので、暇つぶしにどうぞ。続くかどうかは未定未定です。

終わりにしたい始まり

成犬、じゃないや、聖剣を渡されて、「さあ、魔王狩りに行ってこーい!」と家を追い出されたら、貴方はどう思うだろう。

一、使命感に燃えて張り切って旅に出る

二、今はやりのチート能力(?)で一瞬にして全てを終わらせる

三、疑問を抱きつつもなんだか流されて旅に出る

私の場合は大違い。

行ってこい、と言ったのは白髪の混ざり始めた父親で、そもそも聖剣は布に包まれて物置にずっと置いてあった(子どもの頃はチャンバラして遊んでいた)棒だ。いや、布外したらちゃんと剣の形してたけど。

それで今進んでいる道が、家の裏の山の中ってどうよ? どうなのよ? 結局三のコース?

膝丈に伸びた下草を蹴り飛ばすようにしながら、獣道とも言えない道を、私は歩いていた。

一応、聖剣を腰に帯びているけど、何の役にたつというのか。

「そつだ、そもそも『魔王狩り』ってなにさ……」

一人、首を傾げる。

だってそうだろう。魔王ってのは、この世の悪者を束ねる悪の親玉だろう。一人だろう。

それで行くと、『狩り』という言葉は複数いる獲物を捕りに行く時に使う言葉なんだから、こんな可笑しい事は無い。

……もう、適当に山の中歩いて帰ろうかな。

そんな風に投げやりに考えていた頃だった。

小さな、本当に小さな声が足元から掛けられた。

「……あのう、あのう。……勇者様ですよねえ」

初めは気付かず、女にしては長いと褒められる足をすいすい動かして前に進んでいった。

しかしヤツは諦めなかった。

「……あのう、あのう。……勇者様ですよねえ」

一瞬、耳に何か入った様な気がして私は足を止めた。

これでも山育ち。自給自足は当たり前。そんな環境で育ったのだから、獣の気配には割と敏感な方だ。

周囲を機敏な動きで見渡すが、何もいない。

気のせいか……。

そして再び歩き始めた私の前に、ヤツは、捨て身の行動に出た。
すなわち、足元に転がり出て来たのだ。

「っっわ！」

私が驚きの声を上げたのは二つの理由からだ。

一つ目、動く筈の無いものが動いていたから。

二つ目、小さいから踏みそうになったから。

私の目の前に転がり出て来たのは、黄土色の丸いフォルムの、キノコだった。

木の子と書いても、茸と書いてもいい。

キノコだった。

しかも、ご丁寧に目と口がある。鼻はどうした。

そのキノコは、黒いつぶらな瞳で私を見上げ、こう言った。

「初めまして、勇者様。僕がキノコの魔王です！」

すっげえ小っさい声で。

私の返答はと言えば、こうだ。

「いや、キノコでしょ。それも、ヤマキイロホコリタケ」

「その通りです。さすが勇者様です!」

やたら嬉しそうにヤマキイロホコリタケは両手を叩いた。

……両手?!

細い、棒人間のそれみたいな手がちゃんとあった。足もそれに然り。

キノコは嬉しそだった表情から、突然、はっとしたように動きを止めた。それから徐々に両手を体の横に下ろして、(多分)深刻そうな顔をした。

まあ、口が下三角 から真一文字に変わったただけですが。

やがて重々しく口を開いた。

「勇者様。僕はキノコの魔王です。貴女が倒すべき敵です」

両手を一杯に開いて、精一杯の自己主張を行う。

「さあ、一思いに殺っちゃって下さい!」

唐突に、喋るキノコに自分を倒せと言われた私の気持ちを理解してくれる人はいるのだろうか。いや、いない。

けれど、ここはきちんと意思表示をするべきだろう。

「心の底からお断りだ」

キノコは、その小さな瞳を目一杯開いた。

「何故です!」

身を乗り出して、不満を表す。

だから私はきちんと説明してやった。

「だって、あんたヤマキイロホコリタケじゃない」

「そうですが、何か?!」

どうも理解できなかったらしい。

「……ヤマキイロホコリタケだよ?」

漢字にするとこうだ。山、黄色、埃、茸。

山地に生息し、黄色というか黄土色をしていて、そしてそのふつくと丸い身の内に、大量の胞子を溜め込んでいるのだ。

「昔さあ、畑に大量に生えちゃって。駆除した時にうっかり割っちゃったんだよね。そうすると、あんたら凄い胞子だすじゃない? ああ、きな粉みたいなのを、私は大量に吸っちゃったの」

内臓にキノコが生えるのではないかと、一ヶ月は戦々恐々としたものだ。

きな粉好きの皆さんには申し訳ないが、あれはかなり凄まじい。味の問題では無いのだ、粉塵の細かさの問題なのだ。避けようが無い、恐ろしい細かさなのだ！

「で、では、私を倒す事は出来ないと仰るのですか！」

「切ったら出るじゃん、孢子が」

腰の聖剣が急に重くなった気がした。聖剣自身も孢子まみれは嫌なのかもしれない。

因みに、畑のキノコはどうしたかというと、深く掘った穴に全て埋めました。……また出て来たらどうしよう。

「そ、そんな……。魔王として生まれてこの方、勇者様に倒される事だけを夢見て生きて来たと言うのに！ 一体、僕は一体これからどうすれば……」

うちひしがれ、地面に伏せてしまったキノコに、私は同情心など湧きもしなかった。

このまま帰ろう、と横歩きに進んでいく。

ところがその気配を察したのか、キノコが顔を上げた。

その瞳には潤むものがある。

キノコって以外と水分があるんだなー。なんて考えていると、キノコは声を張り上げた。

「では、では、どうすれば僕を狩って頂けるんですか！」

この場を切り抜けるために、私は考えた。

何を置いても、何故か『狩り』という言葉が頭から離れず。つい、出来心でこう言ってしまった。

「じゃあさ、ウスキキヌガサタケとかになればいいんじゃない。もしたら狩ってあげるよ」

キノコの女王と呼ばれる、希少価値の高い高級食材だ。高く売れるに違いない。

言ってから気がついたのだけれど、キノコって自力で種類なんか変えられないよ、ね？

けれど、足元のキノコの考えは違ったらしい。

どんな光明を見出したと言っのか、私の言葉に、ぱああっと表情を明るくした。

への字だった口がまた下三角に戻っただけだけどさ。

「わかりました！ 僕、頑張ってウスキキヌガサタケになってきます！」

良い笑顔で、森の奥へと走り去っていった。

……おいおい。

話しかける相手がなくて、つい、腰の聖剣に手を置いてぼやいてしまった。

「もしかしてさあ、この調子で色々な魔王が出て来ちゃったりするの……？」

やっぱり、剣は答えませんよね。

終わりにしたい始まり（後書き）

まるでキノコ狩りのお話ですね。（収穫無し）

ふっ、と鼻先で笑ってもらえたら幸いです。

ウスキキヌガサタケは実在のキノコです。ヤマキイロホコリタケは、多分無い……です。

献上された獲物

夕刻、家に帰った私を出迎えたのは、満面の笑みの半白髪親父だった。

彼は意気揚々と、口を開く。

「おお、愛する娘アイザ！ さあ、どんな魔王を狩って来たんだ？ お父さんに見せて見なさい」

両手を差し出すから、そこに今日の獲物である猪を乗せた。

子ども（瓜坊）とはいえ、重いんだ、これが。

父親は、その剛毛に瞳を輝かせる。

「おお、猪の魔王かつ」

「いや。普通の猪。罾に掛かってたのをシメて持って来ただけ」

「……あ、そう。ちょっとハムとかにしちまうか」

猪の肉は固いからな。なんて言いながら、納屋の食肉解体場、兼加工場を持って行こうとする。

家を出る直前で、彼は足を止めて私を振り返った。

「結局魔王には会わなかったの？」

その口調は、「隣のケン君には会わなかったの?」とよく似ていた。ようするに軽い。

「まあ、キノコの魔王には会ったよ」

ぼりぼりと頭を掻きながら答える私も軽い軽い。

「なんで狩ってこないんだよ。父さん、久しぶりにキノコ鍋とかしたかったなあ……。母さんの好物だろう」

ぶーっと唇を尖らせても、可愛く無いぞ、親父。

「ヤマキイロホコリタケだったから」

ふっと遠くを見た後、父は口を開いた。

「そっか……。成熟する前だと食用になるんだけどなあ、あれ」

「もう、まるまると膨らんで、はじけ飛ぶ直前だったよ」

なにせコロコロと転がれる程だ。

「残念だ! 今度は食べられる魔王だといいな。じゃっ」

猪を肩に担ぎ、びしっと片手を上げて、父親は玄関を出て行った。

その背中に、私は呟く。

「魔王狩りっつか、秋の味覚狩りなのか……?」

聖剣の最初の仕事は、猪を吊り下げる棒代わりだったとか、内緒にしておこう。

献上された獲物（後書き）

少なくとも旅には出ずに済みそうです。

試合に負けて、勝負に勝つ……

「よし、野郎ども。秋だ！」

だんつ、と食卓テーブルに拳を叩きつけて放たれたこの台詞、断つておくが父親のものでは無い。我が母ミザリアの台詞だ。

すかさず家族からの反応が返る。

「サー！ イエッス、サー！！」

揃えた手を額に当てて、父は立ち上がった。姿勢は背筋を伸ばした直立不動。

一方の私は、一応の反論を試みる。

「……野郎つて、ウチには親父しか男はいないけど？」

因みに子どもも私一人だ。

「まあ、アイザ。私ちゃんといったわよ、野郎『ども』つて」

その『ども』に私が含まれるらしい。

親父は親父で「全くその通り。ミザリア最高ー！」とでも言いたげに首を縦に振っている。

母はにつこりと微笑んで、私と親父に背負い籠を手渡した。

「この籠に溢れる程の山ぶどうをよろしくね。今年は暑かったから、甘くて上等な実がなっているはずよ。葡萄酒にして売り飛ばして、冬の蓄えにしくっちゃ。……………熊どもに盗られるんじゃないぞ」

最後の台詞は地獄の使者の如き低い声で告げられ、私と親父は震え上がった。

流石はロイド村のみならず、このセンチス国『最後の鉄槌』と恐れられるだけの事はある。（恐れているのはロイド村の人間だけだろうが……）

またしても聖剣を腰にぶら下げて家の裏山に出掛ける事になった私は、親父と並んで歩きながら、ふとした疑問を口にした。

「ねえ、勇者の家系ってもしかして母さんの方の家系なの？」

すると親父は不思議そうに首を振った。

「いいや。父さんの家系だぞ。その聖剣だって父さんが親父から貰ったもんだしな。なんでだ？」

「…………だって、どう考えたって母さんの方が強そうじゃん」

親父は、晴れた秋空を見上げて、アンニユイな溜め息を吐いた。

似合わない。

「母さん、…………ミザリアは、若い頃から強くってなあ。告白した

時も、自分より強い相手じゃないと嫌だって、真剣勝負をしたんだ」

「ふーん」

真剣勝負ってサイコロかトランプかな、と考えた私は甘かった。

「ミザリア VS サイガ。……あのゴングの音は今でも忘れられないぜ」

……肉弾戦！？

「ガチで勝負したの？　なんか、賭け事とかじゃ無くて？！」

目を剥いて叫んだ私に、親父は胸を張った。

「そうだぞ。『ハンデくらいあげるわ』って聖剣を使う事を許してくれたミザリアの、あの笑みの美しさは半端無かった。天上の三女神なんか尻尾を巻いて逃げ出すくらいだ！」

頼むから両腕を体に巻き付けて身悶えするのは止めて欲しい。

その前に、聞き捨てならない言葉があった気がする。

「待って！　父さん、聖剣使ったの？　母さんは？」

親父は良い笑顔で、拳をぐっと握った。

はつきりした事は、母さんは素手だったということだ。

「しょ、勝敗は………」

「父さんの負けだったあ……………」

遠い、遠いところを見て親父は言った。

それ以上聞きたく無かった私は、分かれ道を良い事に左の道に駆け出した。

「じゃ、じゃあ、そっちは父さんに任せたから！」

ダッシュ、ダッシュ、ダッシュ！

「百一回目の挑戦で母さん呆れて結婚してくれたんだ。なんだかなだ言っ、父さんの粘り勝ちだからなー！」

なー！　なー！　なー……………！

私の背後で、親父の声がこだました。

とりあえず巨大な馬車の前には飛び出さないうで済んだらしい。

試合に負けて、勝負に勝つ……（後書き）

センチイス国『最後の鉄槌』は事実かも知れない……。

山のお作法

「ふう〜。知りたくも無かった事実が明かされちゃったぜ……」

走ったせいか、恐ろしい事実のせいか、額にかいた汗を拭いながら、私は一人ぼやいた。

すっかり上がった息を落ち着かせながらてくてく歩いているうちに、ふと気がついた。

「しまった。こっちの道は熊が出るんだった」

我が家の裏山には幾つかの熊の群れがいて、この辺りはその中でも大きめの群れのテリトリーなのだ。

そしてこの季節、冬眠前の彼らは食糧を求めてうろつき回っている。遭遇する確率はかなり高い。

更に言えば、私と同様に甘い山ぶどうを好物としているから、熊除けの鈴は必須アイテムだった。

それが無いとなると……。

「……歌うか」

元々熊の方から人間に寄ってくる事は無い。鈴を鳴らすなり何なり、音を立てていれば、向こうから避けてくれるのだ。

まあ、飢えた熊は別としてね。この場合は死んだ振りなんて何の意味も無い。逃げるか、戦うか。この二択だ。

さて、歌うとなれば何を歌うか。

ここはやはり物悲しい恋歌よりは、陽気な童謡だろう。

そう思った私が、すうつと息を吸い込んだその時だった。

♪おきなくまにたべられて、終わるーなんてーイヤだーっ
H
ey!

歌が、聞こえた。

傍らの茂みの奥のようだ。

妙な歌詞だが、メロディーに聞き覚えがある。ような気がする。

よもや村の子どもが一人で来ているんじゃないかと心配した私は、熊を警戒しつつ、茂みの奥へと足を踏み入れた。

が、しかし。

「いないな……」

少しばかり開けたその場所には、人っ子一人いない。

しかし収穫はあった。

その場所には山ぶどうの木が何本も生えていて、紫色の果実がた

わわに実っていたのだ。

この間、隣のケン君（実在）を脅して教えさせた山ぶどうが沢山穫れる秘密のポイントはここだったらしい。

よっしゃ！ とガッツポーズを決める私の耳に、歌の続きが聞こえて来た。

「せつかくぶどうのまおお〜うにうまれたからには、がっちり勇者様に狩られてやろう！ Year！」

……多分、Yeah！ と間違っている。

目を凝らすと、そこに、ヤツはいた。

一粒だけ、激しくブランコのように揺れている。

その、黒い点としか言い様の無い瞳。一筆書きの口。投げやりに書き下ろされたかのような細い手足が、ぶらぶらと体（果実）の横で振れていた。

私は、見ザル言わザル聞かザルを決めた。

腰から取り出したハサミで、端から順に熟したぶどうの房を切り取り、背中から下ろした籠に入れていく。

そのうち、ヤツは私に気がついた。

やめろ、その目を輝かせるな！

「そこにおわすは勇者様ではあゝりませんか！」

「違う」

「まったくまたゝゝ」

すっかり即答してしまった私に、近所のおばちゃんのようなツツコミをいれてくる。

「不肖、このぶどうの魔王！ 勇者様の訪れを今か今かと待っておりました次第でございますそうろつつ」

訳のわからない言葉遣いで、私を、……歓迎しているらしい。

しかし一度構うと先のキノコの魔王と同じ道を辿りかねない。

私はぶどう収穫マシンと化して、ハサミをぱちりぱちりと動かし、ぶどうを次々と収穫していった。

ぶどうの魔王は私のシカトにもなんらめげる事無く、一人（一粒）話し続ける。

「おおつ、それは、よもや聖剣を変化させたハサミですか。いやゝ、聖剣に狩られるなど、本望本望！」

いえ、普通の園芸用ハサミですが、何か？ とは答えまい。

「いやはや、流石は勇者様。その収穫スピード！ いやつ裏山一！ 熊どもとは比べ物になりませんなっ」

そして、ぶどうの魔王は話せば話す程その揺れが激しくなっていた。

ゆらゆらから、ぶらぶらへ。

ぶらぶらから、ぶらん、ぶらん、へ。

ぶらん、ぶらんから、到頭、ぐわん、ぐわんへ……。

ぷちっ、と可愛い音がしたかと思うと、続いたのは、とんとんとん……、という虚しい音だった。

さしもの私も、ハサミを止めた。

地面に仰向けにひっくり返ったぶどうの魔王は、それまでの陽気さを捨てて呟いた。

「……ぶどうも、木から落ちる」

自然の摂理がそこにあった。

山のお作法（後書き）

第二の魔王は山ぶどう。

美味しいはなし

足元に転がるぶどうの魔王について、私は「放置するのが一番いい」と考えた。

しかし現実がそれを許さない。

母は、「この籠に溢れる程の山ぶどうをよろしくね」と言ったではないか。

一粒の山ぶどうも無駄には出来ない。

私は指先でぶどうの魔王をつまんで、目が合う前にぽいと籠の中に放り込んだ。

さらに既に籠に入っていたぶどうでヤツを埋める。なんだか「ゆう、ひ、はまっ……」とかモゴモゴ言っていたが、聞こえない聞こえない。

再び収穫マシンと化して、木に下がっている普通の山ぶどうを入れる限り全て籠に納めた。

こんもりと山になった背負い籠を見て、流石の母もこれには文句を言ったりはしまいと一人頷いた。

「うっし。帰るべ！」

足取りも軽く山道を歩き、家路へとついた。

ぶどうの魔王の事なんか綺麗さっぱり忘れてね！

「ただいまー！」

背中が重い心は軽く、洗濯物を干していた母に手を振った。

山ぶどうの小山が見えたのだろう、母も仕事の手を止めて手を振り返してくれた。

「お帰りなさい。桶は出しておいたから、洗ってそこにあけてしま
ってちょうだい」

「りょうかい」

家の前には井戸があって、毎年使う大きな桶がそこに二つ並んで
置いてあった。

「あ、そう言えば父さんは？」

一方の桶に背負い籠の中身を出しながら、私は親父の方のぶどう
が気になった。一度に作業してしまえば手間は一回で済むからだ。

洗濯物干しを再会していた母さんは、シャツを広げようとした姿
勢で手を止めた。

宙をしばらく眺めると、唇の片側だけ引き上げて微笑んだ。

「どうせ山ぶどうが足りなかったのよ。ふふっ、今日の夕食は二人
かもしれないわね……」

それってつまり、親父は籠がいっぱいになるまで帰っては来ない
と言っことでしょうか？

母がその問いに頷く事ははつきりしている。

だから私は黙って桶に水を注いだ。

大量のぶどうの中から房から外れた粒が浮力でぶかぶか浮いてく
るが、そこは特に気にもせずじやばじやばと掻き回した。要は汚
れが落ちれば良いのだから。

「じぶう……。げぼっげぼっ」

そんな嫌な感じの声が聞こえたかと思うと、桶の端にぶどうが一
粒張り付いていた。正確に言つと、細い両手足を駆使してしがみつ
いていた。

「んしょんしょっ」

どうにか桶の縁によじ上ると、ヤツは立ち上がり、私を指差した。

「あんまりじゃないですか、勇者様！ 狩りもせずに籠に突っ込ん
で下敷きとはっ。山ぶどうの魔王なのに、この山ぶどうどもの頂点
に立つ者なのに、家来どもに圧死させられるところだったんですぞ
！」

あ、一応魔王って頂点にいたんだな。と感心していると、ぶど
うの魔王は地団駄を踏み始めた。

「幾ら聖剣で狩られ（斬られ）ないと死なないからって、あんなのあんまりです！」

「えっ、魔王って聖剣じゃないと死なないの？」

初耳だ。

すると、山ぶどうの魔王は点のようだった目をぎよるんっと大きくした。

気持ち悪っ！

「ご、ご存じなかったと!？」

突然大きくなった目にかなり引きながら、私は頷いた。

「うん。だって父さんは何も言ってなかったし」

「で、では我ら魔王の事も何もご存じないと……」

「は？　なんか、知つといた方が良い事でもあるの？」

ぶんぶんとヤツは、首が無いので体全体を上下に振った。反動でよろけた。

あゝあ、また桶に落ちるぞ。と思っていると、私の背後から母が顔を覗かせた。

「なーに、アイザ。遊んでる暇があるの？」

まあ、一人で桶の横にしゃがみ込んでいるようにしか見えないですよね。

首だけで振り返ると、そんなに怒ってもいないようで、母は腰に手を当てて立っていた。

「あのさ、母さん……」

「センチス国『最後の鉄槌』……！！」

魔王について何か知っていないかと母に問い掛けようとした私の声を遮る様に、ヤツは母の二つ名を叫んだ。

対して母は、片眉を上げてソレを見下ろした。

「はあ〜ん。今年は魔王が出る年だったのね」

どつりで最近アイザが聖剣を持ち歩いていた訳だ。と呟く母。

私は一体どつちに驚けばいいのだろうか……。しばし悩んで母を優先する事にした。

「母さん、魔王の事知ってるの？」

「当たり前じゃない。ロイド村じゃ、結構有名よ？」

全然全く知らなかったんですけど！

訴えると、母はしてやったり顔をした。

「だって、アイザには秘密ねって皆で謀ってたんだもの。いいお顔」
そう言っ、私の顔をつんと指先でつついた。

これって母に村を率いてからかわれてたって事だよね？ …… 人間不信初めていいですか？

母と話す気の無くなった私は、ぶどうの魔王に振り返った。

すると、ヤツはだらだらと大汗をかいて、母を見上げていた。それは、まるで蛇に睨まれた蛙のようだ。

余裕の笑みでぶどうの魔王を見下ろす母とは正反対だ。

っていつか、母さん、今、「美味しそう」って口パクしませんでした？

「あ、あのさ……」

あまりの動揺っぷりに戸惑いがちに声をかけると、ブリキの人形のようにぎしぎしとこちらを向いた。

「な、何か？」

「母さんの事知ってるの？」

「おおおおおおお！ 当たり前じゃないですか！ センティス国『最後の鉄槌』の異名は裏山に鳴り響いておりますよっ」

吹き出す汗はとどまる事を知らない。

そしてよく見ると、ヤツの体が徐々に小さくなっている。と、言うより、しわしわと皮に皺が寄っていくのだ。

その汗、果汁なんじゃ……。

「やーだ。しわしわの魔王なんてカッコ悪いわよ」

暢気な母の台詞に、ついうっかり「誰のせいですかっ」とツツコミそうになって、何とか黙る事に成功した。

危ない危ない。向こう一年間、「母さん、何にも悪く無いわよねえ？」って根に持たれるところだった。

「な、なんと……」

母の台詞に己を省みた山ぶどうの魔王は、がばつと手近なぶどうに飛びついた。

がぶりと噛み付くと、ちゅうちゅうと吸い上げ、再び桶の縁に立ち上がった。

その実は先程よりもぷりぷりとして、はち切れんばかりだ。

山ぶどうの魔王は、抜け殻のようになった同胞の皮をその手に握り、にやりと笑った。

……口元から、たらりと赤いものが滴った。

もちろん、ブドウ果汁百パーセントです。

美味しいはなし（後書き）

ようやく魔王らしい行為が……？

翌日モーニング

朝。

それは、爽やかにして清々しい一日の始まり。

の、はず。

けれど私の目の前に広がる光景はこうだ。

まず、何故か食卓テーブルの上で山ぶどうの魔王が体操をしている。

よくもまあ、あの細い（細すぎるだろう）手足で屈伸とかするものだ。

「おいっちにーい。おいっちにーい」

そんな掛け声の横では、……ウサギの形に可愛く切られたリンゴが喋っていた。

「ちょあつとお、早く食べてくしないと変色しちゃうんだけどお？」

とても野太い声だ。

例えるなら、男子砲丸投げの選手が会心の投擲を成功させたときに出す雄叫びにの様な声だ。

繰り返す。男子砲丸投げの選手の雄叫びだ。女子では断じて無い。

つまり、聞く限りはオネエさんだ。

「んもお、勇者の小娘！ フォーク刺したんだから、ちゃんと食べなさいよ！」

これだから若い娘は、とぶつくさ言うりんごの魔王（推定）を、誰が食べれると言うのか。

すっげー、食べたくないって。

しかも今年実ったばかりのりんごに“小娘”とか言われたく無いし。

「ちょっと、ちょっと……」

私はリンゴの魔王（ウサギ型）に突き刺したフォークから手を離し、山ぶどうの魔王を突つついた。

「はうっ」

そう小さく叫んで転がった山ぶどうの魔王は、じたばたともがきながら文句を言ってきた。

「酷いじゃないですか、勇者様っ。一回転がると起きるの大変なんですよ！」

問題はそこか？

「や、あれさ。もしかして、リンゴの魔王なの？」

皿の上のウサギ型のリンゴを指差しながらこそこそ聞くと、山ぶどうの魔王もそちらを見た。

私とぶどうの視線の先で、ウサギ型のリンゴは「ふんっ」とか叫んで横倒しになると、によきと伸ばした手足で立ち上がった。

怖い怖い怖い怖い！ フォーク刺さったまんまだから！

若干冷や汗（果汁）をかきながら、山ぶどうの魔王は頷いた。

「ご推察の通りです。あれがリンゴの魔王です。しかし、やつは、その……」

語尾が徐々に濁っていく。

気持ちはわかるが、言うなら言ってしまう。

「その、恐ろしい事に、その……」

「ああん。私、カラダは男だけどココロはオ・ン・ナ。リン姐さんって呼んでもいいわよお」

山ぶどうの魔王の台詞を奪って、リンゴの魔王はしなを作りながら言った。（リンゴって意外としなるんですね）

私はと言うと。そのシュールな光景から目を逸らしつつ、傍らにぶどうに問い掛けた。

「あのさ、果実って……」

皆まで言うなど、山ぶどうの魔王は手を上げた。

「私どもに雌雄の別があるのは花の段階までです」

例外はイチヨウくらいでしたよね。

翌日モーニング（後書き）

イチヨウは木からして雌雄の別があります。

まあ、それは良いとして。

ウサギ型のリンゴの魔王が登場です。

そして、何故か居着いた山ぶどうの魔王。

その辺の事情はヤムオチです。

い、いつか書くかも……？

デザートから昇格？

リンゴの魔王は、山ぶどうやキノコとは比べ物にならないくらい強烈な存在でした。

おもわず敬語が出てくるくらいに。

この魔王。八等分にされてウサギ形に切られていたのだが、フオークを自力で抜いた途端、あるポーズをとった。

某戦闘民族がパワーアップする時の様に、足を広げ、両腕を広げて肩の高さで拳（？）を作る。

「ふんつつっ！」

気合いを一つ放つと、何と！ 皿の上のウサギリンゴたちが、集合したのだ。

どんな接着剤を使用したのか、ぴったりとくっついて、一個のリンゴに戻ってしまった。ちゃんと目と口と手足の位置も無難な場所に移動している。

こ、こええ〜。

いや、本当に怖かったのは、この後だ。

「あらん。一欠片多かったわ〜」

そう言うや、リンゴの魔王は自分の体から一欠片分を取り出して、

ぽいつと投げたのだ。

かなり衝撃映像です。

べしゃり、と皿の上に戻されたリンゴの哀れさといったら無い。

っつーか、なんで皮まで全部戻っているんですか……？

……そうか、これが魔力か。そうだ、そう言う事なんだ。オネエさんの不思議なんかじゃ、絶対ないんだ！

一人で納得しようと頷く私に、いつの間にか近づいて来たリンゴの魔王は口を開いた。

ワンポイントは人差し指と一緒に立てられた小指かもしれない。

指あつたんだ！？

「ちよつとお。アンタが勇者っていうんなら、ホラ、行くわよ！早く準備しなさいい」

何処に？

唐突に言われて、意味がわからない私は、山ぶどうの魔王を見下ろした。

こっちの魔王も、どうやらリンゴの魔王のトンでも無い行動に驚いていたらしい。呆然と目を見開いていたのだが、私の視線を受けて、こちらに振り向いた。

「とか、言ってるけど。どこ行くの？」

聞けば、彼ははっとしたような顔をして、ぽんっと手を打った。

「そうです。勇者様には来て頂きたい場所があるのです！」

そつだそつだ、と一人で納得している。

ぼそぼそ言っているその台詞がところどころ漏れ聞こえる。

「今までの勇者様は……だから資格が……なくて、だから、……
…今回なら………」

意味わからん。

朝食を再開した私を横目で見ながら、リンゴの魔王はリンゴの魔王でぶつくさ言う。

「ったくう。ちょっと女に生まれたからってさあゝ。いい気になつてんじゃないわよあゝ」

なっていないし。

そんな話になった記憶が全く無いし。

私はカップに残っていたカフェオレをごくごく飲み干して、「こちそうさまでした！」と席から立ち上がる。

そこに、母さんが声を掛けて来た。

「ああ、アイザ。今日は家の手伝いはいいわ」

「どどどどど、どうしたの！？ 母さん！」

天変地異の前触れかもしれない。

職に就く前の人間は、家の事を手伝うのが鉄則だと言い切る母の予想外の台詞に、私は激しく動揺した。

熱だ。きつと熱があるに違いない！

慌てふためく私を見て、母さんは「やあねえ」と呆れていた。

「魔王たちが来いって言うからには、そろそろ魔王狩りも最終段階なんでしょ？ だったら、とっと片付けてらっしゃいって事よ」

フライパンを片手に持って腕を組むその姿は、こう言っている。

『今日中に片付けて、明日からきりきり働きなさい』

最終段階も何も、一昨日始まったばかりですよ。とは、言えず。

私は大人しく聖剣を腰に下げて家を出た。

追い出されたに、近くありません？

ところで、山ぶどうじゃなくてリンゴを持って帰って来たらしき親父は、何処に行ったんだろう……。

デザートから昇格？（後書き）

山ぶどうの代わりにリンゴで許してもらえたのか、そこが問題です。何故か次の魔王が出なかったなので、続けて次話を投稿します。笑。

可愛い童謡どころじゃない！

「はい。そこを右に進んで下さい」

肩に乗った山ぶどうの魔王のナビを頼りに、私は山道を進んでいた。もちろん腰には聖剣がある。

「はいはいはい、はいはい」

全くいい加減な返事を私はした。

だって、何処に向かっているのかさっぱりわからないんだから、しょうがないよね。やけくそになったってさあ。

山ぶどうの魔王が「右に行け」といったその道は、昨日親父が進んだ方の道だ。じゃりじゃりと音をたてる小石が敷き詰められただけの手抜き道である。

ああ、空が青い。

そんな風に思いながらしばらく進むと、足元を歩いていたリンゴの魔王がててて、と駆け出した。

私の肩の上で足をぶらぶらさせている山ぶどうの魔王と違って、彼女（あえて彼女で）は細い足を高速で動かして一緒に歩いていたのだ。

リンゴの魔王が足を止めたのは、大きな栗の木の下だった。

……言っておきますが、歌ったりしませんよ。

そこで、赤い果実は腰に手を当てて、くねっと腰を捻った。

腰って……。うゝん。もう突っ込むの止めて良いかなあ。

「ちよつとお。このアタシがわざわざ来てやったんだから、さっさと出てらっしゃいよう！」

その野太い大声に反応が返って来たのは、一、二、三拍くらい後だった。

がさり……。と大きな栗の木の下で草むらで音がしたのだ。

私の手は、聖剣にかざされる前に緩く拳を作っていた。

……習慣なんだよー。持ち慣れてないものに咄嗟に手は伸びないし。

そして、もぞもぞとした動きを繰り返す草むらから覗いたのは、トゲだった。細く長いトゲだ。

何あれ。

そこに、陽気な山ぶどうの魔王の声が響いた。

「ややっ。お元気でしたかな。栗の魔王殿！」

果たして、茂みの中から完全に姿を現したのは、見事なイガ栗だった。全体的に黒に近い焦げ茶色をしている。

普通、木から落ちたばかりのイガ栗は黄緑と茶色が混ざったような色をしているから、その風体は異様と言えば異様だった。

でも、本当に異様だったのは、そこでは無い。

山ぶどうの魔王に『栗の魔王』と呼ばれたそいつには、裂け目があった。イガ栗の裂け目からは、大抵栗の実が見えるだろう。渋皮を剥く前のあれだ。

しかし、こいつの裂け目から見えるのは、漆黒の闇としゃぼんぼした目だ。

わかり易く言えば、イガ栗の着ぐるみを着た物体X状態だ。

え、わかり易くない？ ……ほっといてくれ。

「……………元気で、すみません。ホント、すみません」

陰気な声が聞こえた。

どうやら、栗の魔王が山ぶどうの魔王に返事をしたらしい。

「いやいや、そんな。元気で何よりですぞ」

「……………いや、ホント、自分、生きてすみません」

暗雲が垂れ込める様な、ずどーんと暗い声で栗の魔王は繰り返す。

私の足はじりじりと持ち上がっていた。

なんかムカつかない、この生き物？！

ヤツを踏みつぶさんと足を振り上げる私に気がついた山ぶどうの魔王が焦った声を上げた。

「おおおおおおおお、お待ち下さい。勇者様あ！」

「こんなムカつくヤツ初めて見た！ つ、潰させろおっ！」

早くもイライラが極地に行ってしまった私の襟にしがみついて、山ぶどうの魔王は「お止め下さい」と叫ぶ。

「……………あ、もう、いいんです。栗生に別れを告げるんで。すみません」

諦めの早い栗の魔王は視線を斜め下に流してぶつぶつと呟く。

今度は私の手は聖剣に伸びていた。

余計に苛立ちが増していた私は、「もういいよね？ もう殺っちゃっていいね？」と得物を持つ両手をぶるぶる震わせた。

普通に潰しても駄目なら、聖剣で黙らせるしか無いじゃないかつ。

「ん、もう。殺るなら早くやっちゃってよ」

汗を噴き出す山ぶどうの魔王とは正反対に、リンゴの魔王は小石

の上に腰掛けて、どうでも良さそうに片手を振った。

「だだだだだだだだだだ、駄目ですよ！ 彼しか大魔王様の御座所を知らないんですから〜！」

「……………」

その瞬間、私とリンゴの魔王の動きが止まった。

「は？ 大魔王って……」

緑の肌のあれか？ と聞こうとした私の台詞を遮って、リンゴの魔王が叫んだ。

「いつやあ〜〜〜〜〜〜ん！ だ、い、ま、お、う、様！」

両手を頬（？）の辺りに添えて、腰をくねくねとする。

多分、頬は赤く染まっているのだろう。元から赤いからわかんないけど。

「えーと。……大魔王って、何」

すつとんだハイテンションで、「ちょっと忘れかけてたけど、ど、今、貴方のリンゴの魔王がお傍に参りますう〜」と叫ぶ赤い果実と距離を取りながら、私は山ぶどうの魔王に聞いた。

先程までの苛立ちも何処かへと飛んで行って、聖剣も再び鞘に納める。

「はあ。勇者様にお会い頂きたい、我ら魔王たちの頂点におわす御方です」

まあ、大魔王だそうですね。大ボスカラスボスってヤツか。

「それで、来てもらいたい場所って、その大魔王がいるところ？」

「そうなんです。その場所を知っているのが、あの、栗の魔王殿だけなんですよ」

当の栗の魔王はというと、大きな栗の木の下で、しゃがみ込んで『』の字を書いていた。

「あ、あれはいじけているのではなくて、彼のデフォルトの行動だそうです」

どうでもいい情報をありがとう。

「でも、なんであいつしか大魔王の居場所を知らないわけ？」

私が聞くと、山ぶどうの魔王は至極当然、といった顔をして答えた。

「だって、ほいほいラスボスのところに来られちゃ困るじゃないですか」

ほいほい私をそこへ連れて行こうとしているあんたらは何だ？

続けられた言葉に、私は驚愕した。

「それに、彼はもう五百年も生きて、その秘密を守り続けているんですよ」

「ご、五百年!？」

「数多い魔王の中でも、最高齢です!」

誇らしげに山ぶどうの魔王が胸を張る横で、私は戦いた。

視線を感じたのか、しゃがみ込んでいた栗の魔王が、ちらりとしよぼついた目をこちらに向けてくる。イガ栗の裂け目の奥にはやはり漆黒の闇しか見当たらない。

あの中身は、五百年の間に一体どんな変化を遂げたというのだろうか……。

可愛い童謡どころじゃない！（後書き）

栗の魔王が登場です。

少なくとも、こいつは食べられないと、私はそう思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5951w/>

魔王狩り

2011年10月23日02時13分発行